

□ オーケストラ

東条 碩 夫

●3楽団による「グレの歌」競演

稀にしか演奏されない大曲が、異なる演奏団体により、不思議に短期間に集中して取り上げられることがよく起きるものだ。2019年のシェンベルクの「グレの歌」など、その好例であろう。3月に読売日本交響楽団が常任指揮者カンブルランの退任の置き土産として定期公演で演奏すると、4月には東京都交響楽団が音楽監督・大野和士の指揮で、「東京・春・音楽祭」の一環として演奏した。そして10月には東京交響楽団も音楽監督ノットの指揮で、ミュゼザ川崎シンフォニーホール開館15周年記念公演の一環として演奏した。いずれも各指揮者と楽団とが腕に縋りかけた快演だった。それらが多くの聴衆を集めていたという事実も、多様なレパートリーが聴衆に受け入れられていることを示すもので、喜ばしい現象と言えよう。

●オペラを演奏会形式で

各楽団がオペラの演奏会形式上演に積極的に取り組む動きはこの数年来増加していたが、2019年にはその数こそやや減ったものの、演奏水準の極めて高い公演が揃った。その最たるものは、大阪フィルがデュトワの指揮で6月に演奏したR・シュトラウスの「サロメ」である。ピットではなくステージでの演奏という特徴を生かし、管弦楽パートの多彩な音色と雄弁な表情を余すところなく再現する快演をつくり出した。またNHK交響楽団も9月にパーヴォ・カルヴィの指揮でベートーヴェンの「フィデリオ」を、日本フィルも5月にラザレフの指揮でマスカーニの「カヴァレリア・ルスティカーナ」を取り上げ、いずれもオーケストラの表現力を浮き彫りにすることに成功していた。これらは更に、煩わしい演出に気を散らされずにオペラを楽しみたいと思う聴衆をも喜ばせたであろう。

●共同企画等

各オーケストラの自主企画というよりは招聘事務所の企画という色合いの濃いものだが、オーボエ奏者・指揮者のハインツ・ホリガーが80歳記念として、9～10月に国内4楽団——札幌交響楽団、大阪フィル、東京シティ・フィル、名古屋フィルを各々異なったプログラム（結果的にわずかな重複も生れたが）を携え縦断するという興味深いシリーズが開催された。よい試みだったが、もしこれが4楽団の共同企画として大々的に打ち出されていれば、さらに広く話題を集めたかもしれない。実際に共同企画として開催されているものには、大阪で2015年から行われている、主要4楽団が同日・同一会場で競演する「4オケ・スペシャル」がある。これは、2019年には2団体ずつによる合同演奏という形となり、また秋には4楽団がそれぞれの定期に没後70年記念のR・シュトラウスの作品を演奏するという試みにまで発展した。こうした企画が今後どのように音楽界を盛り上げるか、大いに注目されるところである。

●国内オーケストラの主な動向

全国でも読売日本交響楽団、NHK交響楽団、京都市交響楽団の演奏の高水準が評価されているが、最近ノットが音楽監督を務める東京交響楽団と、インキネンが首席指揮者を務める日本フィルが目覚ましく演奏水準を高めており、大阪フィルも尾高忠明が音楽監督に就任以来、アンサンブルが整備されるにいたっている。また各オーケストラの定期公演のプログラムに、所謂名曲のみでなく、珍しい曲や初演の現代作品などが織り込

まれる傾向が以前より強くなって来たのは、レパートリーの拡大の面だけでなく、聴衆に「それまで知らなかった音楽」を提供するという面からみても、歓迎すべきことである。ほんの一例だが、読響は1月に山田和樹の指揮で諸井三郎の「交響的断章」と藤倉大の新作「インパルス」（日本初演）を、11月にネトピルの指揮でリゲティの「チェロ協奏曲」を演奏、東響は5月にノットの指揮でブーレスズやヤン・ロビンの作品をベートーヴェンの「第5交響曲」と併せたプログラムを組んだ。日本フィルは6月にインキネンの指揮で湯浅譲二の「ミッドナイト・サン」やサロネンのヴァイオリン協奏曲を演奏、関西フィルも鈴木優人の指揮で黛敏郎・矢代秋雄・芥川也寸志の作品を取り上げた。意欲的な公演が多かった。

●主要オケにおけるシェフ等の交替

読響では個性的なプログラム編成で功績を挙げたカンブルランが退任、4月にセバステイアン・ヴァイグレが常任指揮者に就任した。群馬交響楽団では音楽監督・大友直人が退任し、4月から小林研一郎がミュージック・アドバイザーに迎えられた。また山形交響楽団では音楽監督・飯森範親が芸術総監督の肩書となり、4月から阪哲朗が常任指揮者となっている。セントラル愛知交響楽団でもスワロフスキーが名誉音楽監督となり、若い角田鋼亮が常任指揮者に就任した。この他、東京シティ・フィルは藤岡幸夫を首席客演指揮者に、大阪交響楽団は太田弦を正指揮者に迎え、新たな活動に力を入れ始めている。

●来日オーケストラから

2019年も30団体ほどにおよぶオーケストラが来日したが、最も話題が沸騰したのは、2月に初来日したクルレンツィスとムジカ・エテルナのコンビであろう。今回はチャイコフスキー・プロを演奏したが、楽器のバランスを自由奔放に変えた大胆な響き、デュナミークの対比を大きく設定しての激しい感情の表現などは、これまでの常識を覆すほどの演奏で、聴き手を震撼させた。こうした演奏は極めて特殊なスタイルとも見られるが、オーケストラ界に刺激を与え、聴き手にオーケストラというものの多様性を考えさせたことは確かであろう。

日本人指揮者が外国の楽団を率いて国内で演奏した例としては、大野和士とバルセロナ交響楽団（7月）があったが、公演ごとに大きなムラのある演奏で、正確な判断はし難い。むしろ佐藤俊介がその第6代音楽監督に就任して間もない名門オランダ・パッサ協会管弦楽団とともに指揮とヴァイオリン・ソロで発揮した卓越したリーダーシップが大きな収穫と言えよう（9月）。

その他、数ある来日オーケストラの公演の中では、クリスティ指揮レザール・フロリサン（10月）の温かい演奏によるヘンデルの「メサイア」も光っていた。11月にはフィラデルフィア管弦楽団（ネゼ＝セガン指揮）、ウィーン・フィル（ティーレマ他）、ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団（パーヴォ・カルヴィ）、ベルリン・フィル（メータ）、ケルン放送交響楽団（ヤノフスキ指揮）など大物オケの来日が重なった。シカゴ交響楽団（ムーティ、1～2月）、スイス・ロマン管弦楽団（ノット、4月）、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（ネルソンス、6月）なども来日している。

●悲報と朗報

アンドレ・プレヴィンが2月28日に、ミヒャエル・ギーレンが3月8日に、ラドミル・エリシユカが9月1日に、マリス・ヤンソンスが11月30日に帰天し、巨匠たちの生前の活躍を知るファンたちから痛惜された。一方、前年秋の第18回東京国際音楽コンクール指揮者部門で優勝した沖澤のどかが、9月のプザンソン国際指揮者コンクールで優勝を飾ったことが注目される。